平成三十年七月投句

土用干まだ梅の色浅かりき
土用干去年の梅は残り五個　勝利
梅紫蘇の庭に熱れて土用干

口開けて烏喘ぐや日の盛り
目印の雲に背泳ぎ曲がりをり　節子
一つずつ干梅甕に収めけり

嵐来る月下美人の咲く夜に
打ちつける雨粒夏の灯のにじむ　光子
夏霧の深き朝なり一人居に

新しく塗りたる壁に蝉の殻
登山杖引く四五人やバス停に　真理子
十歩でも開いては閉じ日傘

夕焼ける干潟に潮の縞模様
池底の朽葉泡立つ炎暑かな　由紀子
滴りの山分け入れば摩崖仏